

Prodromal symptoms of out-of-hospital cardiac arrests:
A report from a large-scale population-based cohort study.

院外心停止の前駆症状とその発生時間

Resuscitation in press DOI: 10.1016/j.resuscitation.2012.10.006

西山 知佳 (京都大学)

〈目的〉

突然の心停止の前駆症状を明らかにし、予防的アプローチが確立できれば、その死亡率を減らすことができる。そこで、突然の心停止の前駆症状とその時間経過及び、社会復帰に関連する要因を明らかにすることを目的とした。

〈方法〉

2003年1月から2004年12月の期間に、救急隊が蘇生を試みた18歳以上の目撃のある院外心停止症例を対象とした。ウツタイン様式に基づいて集められている必須項目に加え、前駆症状の有無、内訳（胸痛／呼吸困難／失神／冷汗／背部痛／腹痛／動悸／その他）と発生時間（心停止前<=数分／<=1時／<=24時／>24時）に関して解析を行った。

〈結果〉

研究期間中、救急隊による蘇生処置が行われた18歳以上の目撃心停止数は1466名であった（心原性1,042名、非心原性424名）。心原性心停止患者では、61.8%、非心原性心停止患者では70.0%に前駆症状を認めた（ $p=0.003$ ）。心原性心停止（40.2%）、非心原性心停止（45.5%）ともに40%以上の人が心停止発生の数分以上前から何らかの前駆症状を訴えていた。心原性心停止患者が呈していた前駆症状は、呼吸困難（27.6%）、胸痛（20.7%）、失神（12.7%）であり、非心原性心停止患者では、心原性心停止患者同様に呼吸困難が最も多かった（40.7%）。社会復帰に関連する要因を検討したところ、前駆症状の存在そのものは、脳機能良好な状態での生存には関係はなかったが、救急隊の患者接触が1分遅くなると社会復帰率が10%ずつ低下することがわかった。前駆症状を感じた場合、早期に119番通報を行い、救急隊による早期の処置を受けることで、転帰を改善する可能性が示唆された。

〈結語〉

心停止症例の多くに長時間に渡り、前駆症状があることが明らかになった。早期の救急隊による患者接触が、脳機能良好な状態での1ヶ月生存に影響していることが明らかになった。前駆症状を早期に察知して、迅速に119番通報することで、心停止による死亡率を低下させることが期待される。

【結果の詳細】

〈具体的な前駆症状と症状出現から心停止までの時間〉

前駆症状を訴えていた 61.8%のうち、40.2%の人が心停止発生の数分以上前から何らかの前駆症状を訴えていた。その症状の内訳は、呼吸困難（27.6%）、胸痛（20.7%）、失神（12.7%）があった（表）。

表. 心原性心停止患者における、前駆症状の内訳と発生時間

	前駆症状から心停止までの時間				Total n=644
	≤2-3min n=385	≤1h n=162	≤24h n=73	>24h n=24	
特異的症状, n (%)*					
胸痛	78 (12.1)	33 (5.1)	18 (2.8)	4 (0.6)	133 (20.7)
呼吸困難	112 (17.4)	53 (8.2)	11 (1.7)	2 (0.3)	178 (27.6)
失神	72 (11.1)	9 (1.4)	1 (0.2)	0	82 (12.7)
冷汗	11 (1.7)	11 (1.7)	1 (0.2)	0	23 (3.6)
非特異的症状, n (%)*					
背部痛	7 (1.1)	2 (0.3)	7 (1.1)	1 (0.2)	17 (2.6)
腹痛	2 (0.3)	6 (0.9)	4 (0.6)	1 (0.2)	13 (2.0)
動悸	3 (0.5)	3 (0.5)	2 (0.3)	0	8 (1.2)
その他	124 (19.3)	59 (9.2)	34 (5.3)	12 (1.9)	229 (35.6)

*複数選択